

(様式6-2)

研究成果概要

所属学校名 人権教育課県立学校班

職・名前 充指導主事 荒井 将友

- 1 事業の名称 一般内地留学
- 2 留学先の名称 大阪教育大学
- 3 研究主題 人権教育に関するもの
- 4 研究成果の概要

教諭として13年になり、担任・分掌の仕事を経験してきた。自分なりのスタイルも徐々に作られてきた中で、もう一度自分自身が原点に戻り、新たなる成長を遂げたいという思いがあった。内地留学を通して今までの自分自身を見つめ直して、そして新しい自分自身を発見していきたいと思うと同時に、内地留学先での出来事を生徒や同僚に環流し、生徒一人ひとりの人権意識の高まりや、自己啓発につながるように一生懸命学んでいきたいと考えた。

留学期間中は、森実教授の授業を中心に人権・同和教育に関係する講義を受講した。講義中のグループワークでは大学生の考えや思いを知ることができた。木曜4、5限目の人権教育論の時間には、人権に関わる映画を視聴したり、外部で開催される学習会等の情報交換をおこなったり、学生の活動報告を聞いたりした。

講義で学んだことで2つ挙げて研究成果の概要としたい。

①「ねた子を起こすな」論について、

部落問題に係わる講義で学生と話していると「そっとしておけばみんな知らなくなり部落差別は解消する」と思っていたという声や「知ってしまったら気にしてしまう」という声が聞こえてきた。また、それよりも「部落差別ってまだあるの?」「部落差別を身近に感じないから実感がない」と聞いたことがある。授業で使用していたテキストには寝た子を起こすな論についての反論が記載されている。人権問題についてしっかり勉強し始めたのは教員になってからだったが、当時は「寝た子を起こすな」論に賛成だった。しかし、部落出身の生徒と関わったり、いろんな方の思いや願いを聴くうちに「寝た子を起こすな」論に疑問をもつようになった。もし「寝た子を起こすな」論が正論だとすれば、部落出身の子どもたちが出身地について語れないことになる。誰しもが生まれ育った場所について語る権利があるはずなのに部落出身の子どもたちだけが語ることができないのはいかなものかと思う。また、出身地を話すことに不安を感じる人がいるということは部落差別がなくなっていない証拠だと私は思っている。授業で行ったアクティビティを通して「ねた子を起こすな」論を実行することは無理であることを私なり説明することが可能になった。

②ジェンダーとセクシュアリティの講義を受講して

在籍校にLGBTだとカミングアウトしている生徒がいたわけではなかったが、今後学校で取り組んでいこうと話していたこともあった。また、私は今までいろんな講演会や学習会に参加してきた。その中で当事者の立場で参加してきたわけではなく、当事者の周りには人間(協力者、傍観者、加害者)の立場や意識で参加してきた。実際に講義を受けて意識と行動の変容について、意識が高くなったこと、意識して気付いたから反省することが数々あった。私は教師、男性、夫、父親と様々な立場で講義を聴くことができた。講義を聴いて特に私の言動によって、しんどい思いをしている人が周りにいるかもしれない、また将来そういう人が現れてしまうかもしれないと思った。自分の置かれているいろんな立場から自分自身をふり返り、意識の変化を感じることができた。